

ネズミ島

池田 隆

游泳学校に通う小学生を銜生りに乗せた団平船が、タグボートに曳かれ長崎港を出ていく。キャーキャー・ガヤガヤと子供の声が岸まで響き渡る。行き先は港湾入口の岬の背後に隠れている「ネズミ島」である。正式名称は「皇后島」と格式高い。江戸時代に異国船警固を行っていた深堀陣屋より子の方角に見えるのでその通称がついたという。

周囲数百メートルの密集林に覆われた平らな小さな島である。東側の岸辺は滑らかな岩肌で、西側は砂浜である。北側に浮棧橋が繋がれ、常住者はいない。西側が一般用の海水浴場で、東側半分が明治期から続く夏季游泳学校の専用区域であった。

海洋国家を担う逞しい「海の子」を育てるのが学校設立の目的で、遠泳能力の向上などに主眼を置く。古式泳法にも長けた指導者が奉仕運営し、小学校高学年生が主対象であった。上達度に応じて甲乙丙丁に組分け、全員が布製の半球状の帽子を被る。甲は赤一色、丁は白、乙は赤白赤白の四つ割れ、丙は白地に赤い横線と区別する。さらに甲乙は白い六尺褌、丙丁は黒い三角兵古が慣わしだった。

私は四年生と五年生（昭和二十三年と二十四年）の夏に毎日通ったが、丙組までしか上がれなかった。乙組へ進級するには湾の対岸に在る深堀までの、往復数千口の遠泳試験に合格しなければならない。しかし平泳ぎの力エル足が下手でまだ自信がなかった。六年生の夏は祖父母の住む岩国まで一人旅に出たため游泳学校へは行けず、後で同僚が乙組まで進んだと聞き悔やんだものだ。

ネズミ島も高度成長期に周囲を埋め立てられ、陸続きの工業用地と化してしまった。ただ此処で培われた水泳好きの気質は残った。後年に横泳ぎ（のし）やクロールを見様見真似で習得し、夏の海辺に出掛けると所構わず泳ぎまくってきた。日本各地は勿論、豪州、パラオ、イースター島、ハワイ、インド洋、紅海、カリブ海、地中海、カナリア諸島などなど。この二十年はすっかり山幸彦だが、以前の海幸彦時代も懐かしい。



昭和二十四年、伊良林小学校四年四組がネズミ島へ臨海遠足に行った時の記念写真。一般用海水浴場にて撮影。長崎港の沖合には爆撃で座礁沈没した大型船の残骸が見える。その先の対岸が深堀。



昭和二十三年、ネズミ島の游泳学校へ通う大勢の小学生を乗せた団平船とタグボート。筆者もこの船に乗っていた筈。

(NHK 番組「ブラタモリ」で紹介された資料と写真：長崎100周年史より)